

現代の国語・言語文化

(注) 解答はすべて解答用紙に記入のこと。

なお、出題作品には、設問や読解の都合で多少原文の表記を変えているところがあります。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

それは、大きな緑色の石が載った、おもちゃみたいな指輪だった。

「恵も何か欲しいものはないか？」と叔父から電話がかかってきたのは、五年前のことだった。

祖母の家が取り壊されることになり、家財道具を整理していたのだろう。恵は、勤めている幼稚園の入学式で配るお便りを作り終えると、祖母の家まで車を走らせた。特に欲しいものはないが、もう一度あの家を見ておきたいと思ったからだ。

慣れ親しんだ山道を登り辿り着いた場所は、祖父が大事に育てていた庭園の木々も伐採され既に知らない人の家のようなだった。それでも、玄関を開けて「こんにちは」と言う祖母の返事が返ってきそうだった。物が散乱した部屋の中を注意深く歩く。お正月に叔父や従兄弟たちと遊んだ花札やランプが床に散らばっている。おじいちゃんが継ぎ足し入れていた黒飴の瓶も中身が入ったまま足元に転がっていた。子どもの頃、^①憧れたこの家の全ての魔法が解けてしまっていた。母さんは、見るのが辛いからと来なかったらしい。

恵には、大きな桐の筆筒^{たんす}も着物も必要なかった。家の中を一周したあと、祖母の日用品を入れていた黄色に花柄の小さな整理筆筒がほしいと言った。

「こんな安物の筆筒でいいのか？」と言いながら、叔父の顔はほっとしていた。きっと既に着物やテーブルは引き取り手が決まっていたのだろう。立て付けの悪い引き出しを開けると、おばあちゃんの家の懐かしい匂いがして、思わず涙が出そうだった。一番上の引き出しからは見慣れたカラフルな包装紙が出てきた。しかも山のように。

「おばあちゃんってデパートの包み紙ためてたよね。ちらし寿司なんか作って持たせてくれるときに、ここから出してパックを綺麗に包んでくれたんだよ」

^②食器を分類しながら叔父は興味なさそうに返事をした。筆筒は自分の乗用車に積んで帰れる大きさだったので、恵は足早に立ち去り、そのまま一人暮らしを始めたばかりのアパートに持ち帰った。

「それで？それでこの指輪はどうしたってのよ?！」

妹の真由華がマシンガンみたいに問い詰めてくる。

「だから、引き出しの一番上に入ってたの」

「桐の着物簞笥じゃなくて？ デパートの包み紙が入ってたこのおんぼろの引き出しに？」

「うん。あの日、包装紙も入れたまま持って帰ってきて……」

「それで五年間、指輪に気づかなかったの？ うそだー、お姉ちゃん指輪があるの知ってて、この簞笥を持って帰ったね??」

「やにやしなから真由華がけしかける。」

「違うよ。本当に昨日気づいたんだよ」

「にしてもでっかい石。絶対高いよね、これ」

真由華が右手の中指に、その緑の大きな石がついた指輪を入れてみるとぶかぶかで、親指に入れてもまだ緩かった。

戦中に高校時代を送った祖母は、戦地に行って男手のない農家へ、勤労奉仕として手伝いに行っていたのだと聞いたことがある。勉強ひとつさせてもらえず、朝から晩まで外で働いたから顔はシミだらけに、指はいいちゃんより太くなったのよ、なんて嘆いてたっけ。

「お姉ちゃん！ これさ、翡翠(注1)だよ。この大きさと八十万くらいだって！」

スマホをいじりながら真由華が叫んだ。

「へー。すごいんだね」

紅茶を入れながら差し出されたスマホの画面を見る。確かにこの指輪と同じ深い緑色をしていた。アーモンドほどの大きさの石は、ぱっと見おもちやの飴みたいに見えたが、本物だとしたら逆に安いくらいだと思った。

「ねえ、確か私が高校生のときさ、おばあちゃん指輪がないって捜してなかった？」

「そんなことあった？」

「絶対そうだよ。この緑色の指輪、結婚指輪の代わりだって、ときどきしてたじゃん」

こういうことだけ真由華はよく覚えているのだ。母さんの誕生日とか待ち合わせの時間なんていつも忘れているのに。言われてみれば、祖母は確かにそんな事を言っていた。結婚のときに大した指輪を買ってあげられなかったから、じいちゃんが後でくれたのだと、嬉しそうに何度も話し

ていた気がする。それを何だって包装紙と一緒にしまい込んでしまったのだろう。

「おばあちゃんさ、ずぼらなとこあったじゃん？ 冷蔵庫の中もぐちゃぐちゃだったしき、お年玉も開けてみたら空っぽだったり」
確かに、帰ってポチ袋を開けてみたら空っぽの年があつて、真由華が電話したのを思い出した。

「なるほど。普通なら考えられないけど、この指輪を何かの拍子にここに入れたまま忘れちゃったってわけね」

ノートも消しゴムも鉛筆も、祖父母の家はいつも引き出しいっぱいに買い置きがあつて、行く度に新しいのをもらうのに、またいつの間にか増えていた。今思えば病的なまでのストック量だった。^③「おばあちゃんの若い頃は買いたくても物がなかったからね、今は好きなだけ買いたいの。物に囲まれていたいのよ」と無邪気に言う祖母の言葉は、誰にも責められない切なさがあつた。

高価なものなら叔父さんに返した方がいいんじゃないかと言つたが、案の定、真由華は黙っていればわからないよと言うので、また引き出しの中にしまった。

深夜にインターホンが鳴った。入ってくるなり、俊介が「疲れたー」とソファに崩れ落ちる。ワイシャツの襟元がくすんでいた。また徹夜続きだったのだろう。彼の仕事は順調だ。順調に忙しいのだから喜ばしいことだ。落ち着いたらねと言いながら、いつになったら「本当の意味で」一緒に暮らすことになるのだろう。知らぬ間に相手の荷物が増えていく部屋は、共に暮らすということからは離れていつているように見えた。

トマトスープを温めながら、お風呂の追い焚きスイッチを押す。そうこうしている間に、うつ伏せになったまま俊介の寝息が聞こえてきた。起すのが可哀想だから、そっとブランケットをかけて、追い焚き停止のボタンを押す。^④このまま、ずるずると生活は続いていくのだろうか。

「どこかにもっといい男が落ちこちているわよ」と真由華は言うけれど、恵にはソファで眠るこのひよろ長い男しか考えられないのだった。どうしてかと言われると言葉に詰まってしまうが、この黄色い整理ダンスを愛するように、たとえ古びても飽きずに愛していける自信があつた。「恵ちゃん欲がなさすぎるよ」と子どもの頃から母や友人に言われ続けてきた。違う。本当は自分は誰より強欲だ。殆どのは何だつていいのに、手に入れたいものは絶対に手に入れないと気がすまなかった。

そつと俊介のメガネを外してやると、リビングの電気を消す。恵は引き出しの中から緑の指輪を取り出し、若かりし日の祖父母のことを考えた。一緒になるとときには、六十年という歳月を共に歩くことになると思像さえしなかったのかもしれない。指輪は月明かりに照らされて、長い眠りが

ら覚めたようにゆらゆらと輝いていた。

翌日、幼稚園から帰ると真由華に電話をかけた。

「あの指輪、まゆちゃんにあげるよ。でも売ったりしちやダメだか……」

「お姉ちゃん！私も今電話しようと思ってたところなの!!」

「なによ慌てて。どうしたの？」

「あのね、その指輪偽物なんだって」

「ええ？」

「さっき気になって母さんに電話で聞いたのよ。そしたらね、あれ翡翠じゃなくて合成樹脂だつてさ。残念でしたー。だからお姉ちゃん。おばあちゃんの形見だと思って大事にとっておきな。ね！」

そうして、真由華は母から聞いたという一連の指輪物語を話し終えると、くすくすと笑いだした。恵もなんだか可笑しくて声を上げて笑ってしまった。^⑤

そうこうしていると、今日は仕事が早く終わったのか、俊介がちゃんと合鍵で帰ってきた。笑っている恵を見て、つられて顔をくしゃくしゃにしている。こういうところが好きだったんだと思い出した。

電話を切ると、「楽しそうだね？」と聞いてくるので、ここまでの指輪物語を俊介にも話した。翡翠の指輪を買ったあと、じいちゃんは事業に失敗して、多額の借金を抱えてしまったらしい。家中の宝石や着物^(注2)を質に入れ、親戚に借金をして、二人は何とか母さんたちを育てた。そして、おばあちゃんはこっそり、おじいちゃんが買ってくれたのと似たような緑色の樹脂の指輪を買ったのだ。おじいちゃんは、それを死ぬまで知ること^⑥はなかったそうだ。

「偽物だけど、本物だったってことだね。その指輪、大切にしなきゃ」

と、俊介が言った。同じことを考える人がすぐ傍にすることが幸せなのだった。窓を開けると、隣のマンションから速弾きのピアノ演奏が聞こえてくる。それに合わせて姉妹がきゃっきやと笑って走り回るのが見える。子供の頃、真由華と祖母の家へ泊まりに行つて、あんな風に走り

回った。あの懐かしい家はもうないけれど、その欠片は自分を構成する土台の要所要所にはまっていて、これからもずっと支えてくれる気がした。

「僕らも、恵のじいちゃんとかあちゃんみたいになれるといいなあ」

と俊介が言った。

「嫌よ。私、指輪を質に入れたくないもの」

照れ笑いをしながら、素直になれない自分が憎らしかった。

（注）

（高橋久美子「指輪物語」より）

1 翡翠 宝石の一種で、半透明な深緑をしている。

2 質 価値のある品物を担保にしてお金を借りること。期限内に利息も含めた支払いができない場合は、他の客に売却される。

問一 傍線部①「子どもの頃、憧れだったこの家の全ての魔法が解けてしまっていた」とあるが、これはどういうことか。説明として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 庭園の木々が切られてしまい、知らない人の家のように、思い出を喚起させるものが、もうそこにはなかったということ。

イ 幼い子どもの想像力は、大人とは比べ物にならないほどであり、もう自分は想像力のない大人になってしまったということ。

ウ 家にある物は、物質以上の意味を持っていなかったものであって、それは、家にかつてあった生氣によって保たれていたということ。

エ 子どもの頃に魅力を感じた祖父母の家やそこにある物も、大人になった今となっては、ひどくつまらないものだと思ってしまうということ。

オ あくまで祖父母と過ごす時間が楽しかったのであって、祖父母のいないこの家には何の価値もなかったことが認識されたということ。

問二 傍線部②「食器を分類しながら叔父は興味なさそうに返事をした」とあるが、叔父がこのような態度をとったのはなぜか。理由として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 数日にわたって遺品整理を忙しかしていたため、恵の話に対して十分な相槌を打てる余裕がなかったから。

イ 恵の話は自分にとって初めて聞いたような話であり、どう返事をしていいか迷ってしまったから。

ウ 時間も遅いので余計な話をせず、早く筆筒をもって帰ってほしいという気持ちを抱いていたから。

エ 恵の話は叔父にとってはあくまで過去の話であり、今の自分にとってどうでもよい話だから。

オ 恵の話は生前のことを思い出させる辛いものであり、そのことを悟られないようにしたかったから。

問三 傍線部③『「おばあちゃんの若い頃は買いたくても物がなかったからね、今は好きなだけ買いたいの。物に囲まれていたいのよ」と無邪気に言う祖母の言葉は、誰にも責められない切なさがあった。』とあるが、恵がそのように考えた祖母の背景を、本文中から三十一字で書き抜きなさい。

問四 傍線部④「このまま、ずるずると生活は続いていくのだろうか」とあるが、恵が本来希望する「生活」とはどのようなものか。本文中から十六字で書き抜きなさい。

問五 傍線部⑤「恵もなんだか可笑しくて声を上げて笑ってしまった。」とあるが、恵が笑ったのはどうしてか。恵が笑った理由を五十字以内で書きなさい。

問六 傍線部⑥「偽物だけど、本物だったってことだね。」とあるが、それはこういった意味か。最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 祖母にとって翡翠の指輪は忘れられないものであり、偽物は、本物を思い出すためのものであったということ。

イ 合成樹脂でできた偽物の指輪であっても、祖父にとってみれば、本物の翡翠の指輪であったということ。

ウ 偽物を本物だと思い込んでしまうように、人間の認識というものは当てにならないということ。

エ 偽物であっても、本物として使っているうちに、周囲の人たちにとっては、本物に映るようになるということ。

オ 一般に価値があるかどうかよりも、当人がそのものをどう捉えているのが重要であるということ。

問七 この作品の特徴として、**適当でない**ものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 恵以外の人物の心情を語らないことで、恵の視点から物語の展開を追うことができる。

イ 会話や発言、行動を通じて、登場人物の人物像を立体的に描き出そうとしている。

ウ 恵の思考や知覚したことのみを描く、一人称視点の作品である。

エ 指輪が作品のなかで重要な意味をもつような筋立てになっている。

オ 地の文に口語的な表現が見られ、読み手の感情移入を誘っている。

100 円稼ぐのに 1 万 5 千円かかる芸備線 始発駅から乗って、考えた

■A-stories

一部区間の存廃問題で揺れる J R 芸備線。東側の終点新見（岡山県新見市）から、始発に乗った。午前 5 時 16 分発、備後落合（広島県庄原市）行きの 1 両編成。乗客は、ローカル線めぐりの鉄道ファンら 2 人と私だけだった。

新見駅発の芸備線は平日で 6 本、土日は 5 本しかない。途中の東城（同市）から備後落合までの区間は、100 円の営業収入を得るのに必要な営業費用（営業指数）が 1 万 5 千円を超す（2020～22 年平均）。1 キロあたりの 1 日平均通過人員（輸送密度）は 20 人（22 年）。ともに J R 西日本でワーストの区間になる。

人口減とマイカー利用が地方で進むなか、ローカル線問題をどう考えるべきか。取材班は、その原点とも言うべき 1987 年の国鉄分割民営化当時の関係者に当たることから取材を進めた。

■本数減らすと利便性も減 さらに利用客減る悪循環

改革派として分割民営化を成し遂げた幹部、関わった政治家、官僚らは当時、ローカル線問題をどう考えていたのか。共通するのは、営業利益や国鉄時代の組合対策を重視するなかで、ローカル線に関する議論は、必ずしも優先順位が高くなかったという点だ。もちろん、当時の段階で 37 年後の今の日本がどうなっているか、見通せていたわけではないという事情もある。

一方、分割民営化した J R 各社にとって、管内のローカル線は営業利益を生まない「お荷物路線」扱いが強まった。本数を減らすことで利便性が失われ、利用者がさらに減る悪循環に陥る路線もある。かつて備後庄原（広島県庄原市）から広島まで直通で行けた路線はいま乗り換えが必要だ。

日本全国のローカル線網をどうすれば維持、活性化できるか。国土交通省などの政府機関、政治家、自治体が利用者を巻き込んで議論すべき問題だが、分割民営化後の J R 各社に対応が丸投げされた面もある。

■「個別の路線だけでなく、全国的な議論を」

その J R 各社には全国的な視野はない。例えば芸備線をめぐる対応を広義のローカル線問題として J R 西日本以外の各社に聞いても「管内以外の問題」という受け止めになってしまう。

持続可能で利便性の高い公共交通機関としてのローカル線の機能、役割をどう考えるべきか。議論は始まったばかりだ。芸備線をめぐっては、国、沿線自治体、J R 西日本、交通事業者などで、路線の再構築に向けた協議会が今年 1 月に発足。実務者レベルでの初の「幹事会」が 5 月に開かれた。赤字路線を廃止したい J R、存続を望む自治体、それを見守る行司役的な立場としての国という構図だ。

だが、協議会に関わる自治体関係者からは中立的な国の立場に疑問の声もあがる。「交通、移動の基盤整備をどうするかについては国の方で今後の方向性を示してほしい。個別の路線をどうするかだけでなく、全国的なネットワーク機能をどうするかという議論があってしかるべきだ」

■鉄道網の維持「輸送密度1千人がボーダー」

公共交通機関としての鉄道の特性は、(1)大量輸送(2)速達性(目的地までの所要時間)(3)定時制の三つと言われる。全国至るところに切符一枚で行ける広域利用、ネットワーク機能もある。その機能の維持は、輸送密度が1千人を切ると難しくなると言われる。西日本でもし現在1千人以下の路線を地図上から消したらどうなるか。JR西日本の資料をもとに庄原市が作成した図を見て驚いた。

瀬戸内海に面した山陽側をのぞく、中央部や日本海側はほぼ鉄道網が無くなってしまふ。いったん廃止すれば、別の交通機関では三つの特性を取り戻すことは難しくなる。

路線としての芸備線は、備中神代(こうじろ)(岡山県新見市)から広島まで。芸備線の車両は、備中神代と新見の間6.4キロの区間では、伯備線に乗り入れる形で運行している。存廃が議論されている備中神代―備後庄原間68.5キロがもし廃止されれば、新見から広島へはいったん、伯備線で倉敷(岡山県倉敷市)まで行き、山陽線または新倉敷駅から新幹線に乗り換える必要がある。乗車距離は40キロ以上増えることになる。

庄原市では、JRとバスを片道ずつ組み合わせた割引往復切符を市の支援事業として始めた。備後庄原と広島との往復は、バスと鉄道を片道ずつ使うと通常なら3710円(バス2020円、鉄道1690円)。実際は往復とも本数の多いバス利用に偏りがちだが、鉄道を片道利用すれば2500円に割り引く。鉄道利用を少しでも促進させようとの思いがある。同市の担当者は「飛躍的に伸ばすことは難しいが、まだ伸びしろはある」と語る。

鉄道の特性には「居住性」の高さもある。大型のスーツケースで移動する外国からの旅行者(インバウンド)の利用の高まりは、37年前には想定していなかっただろう。1987年は約215万人だった訪日外客数は、コロナ禍前の2019年には約15倍の3188万人に達した。若い世代を中心に、リモートワークで大都市圏から離れて仕事をする選択肢も広がりつつある。

こうした時代の変化をローカル線網の活性化や維持にどうすれば結びつけられるか。

記者が芸備線に乗った3月下旬は、季節外れの大雪が降り、一面の銀世界に。列車は、樹氷のトンネルをくぐるように進み、車窓からは幻想的な風景が広がった。

多様な歴史と風土、文化を持つ地方の魅力を発信し、外国人旅行者や都市部の若い世代を受け入れられるインフラ(社会基盤)をつくるには、官民双方の知恵とカネ、ヒトが必要になる。メディアとしても報道を通じて、その議論に積極的に関わっていきたい。

石合力《朝日新聞デジタル》

(「分岐点 ローカル線の行方 第5回 2024年6月14日」より)

問一 この新聞記事から読み取れる「ローカル線」の抱える課題を書きなさい。

問二 鉄道の特性である「速達性」と「定時制」を別の言葉で言い換えなさい。

問三 このネット記事の論調として、最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 取材から得られた事実から、勇気をもって世間に訴えかけていこうという論調。

イ 自分で取材したことをもとにしながら、読者とともに考えていこうという論調。

ウ ローカル線の衰退を招いた政治家たちに対して、はっきりと責任を追及していこうという論調。

エ ローカル線を、特に経済の視点から切り取り、今後の経済情勢と関連づけていこうという論調。

オ 大都市中心に考えることを否定し、地方の現状に目を向ける公正公平な論調。

問四 この新聞記事をもとに議論を行います。はい／いいえで答えることができず、最も議論が活発に行われるものを「良い問い」とした場合
それに最も当てはまるものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 社会情勢は、どのようになっていて、それはどのようにローカル線の維持、活性化に結び付きそうですか。

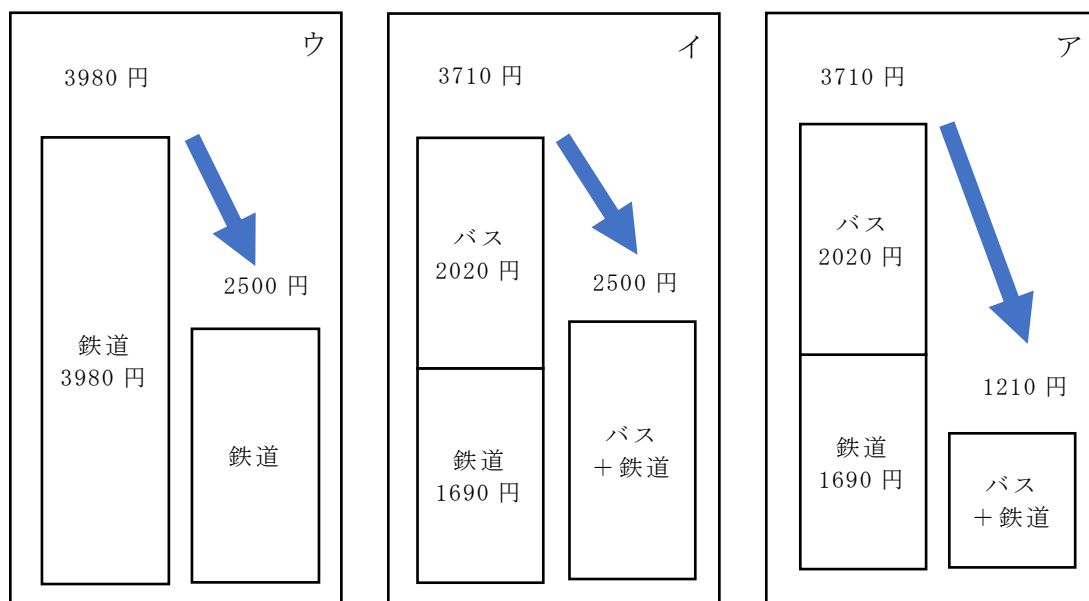
イ 社会基盤をつくるには、官民双方の知恵とカネ、ヒトが必要となるという、筆者の考えに賛成ですか。

ウ 魅力を発信し、外国からの旅行客を呼びこむことができれば、ローカル線を維持することはできますか。

エ 大都市圏に人口が集中するなかで、地方が活性化、維持していくためにはどうすればいいと思いますか。

オ 時代の変化を踏まえつつ、ローカル線網の活性化、維持を目指した具体的な取り組みは何かありますか。

問五 鉄道を片道利用すれば2500円に割り引くところがあるが、これを図にした際、最も適当なものを次のア～ウのうちから一つ選び、記号で答えなさい。



三

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

三

の問題は、著作権の利用許諾が得られていないため、非公開とさせていただきます。

三の問題は、著作権の利用許諾が得られていないため、非公開とさせていただきます。

三の問題は、著作権の利用許諾が得られていないため、非公開とさせていただきます。

三の問題は、著作権の利用許諾が得られていないため、非公開とさせていただきます。

(多木浩二「スポーツを考える―身体・資本・ナショナリズム」より)

(注)

- 1 ラング／パロール ラングは言語体系、パロールは発話を指す。
- 2 コード／メッセージ コードは規定、メッセージは、発信者から受信者へ伝達される情報を指す。
- 3 タイポロジー 類型学。類型を用いて個を全体的に把握しようとするもの。
- 4 ヴイトゲンシュタイン オーストリア・ウィーン出身の哲学者。
- 5 ノアム・チョムスキー アメリカの哲学者、言語哲学者。
- 6 エスニック 民族の。
- 7 エスニシティ 民族がもつ固有の特徴。
- 8 ナショナル 国家の。国民の。
- 9 残滓 残りかす。
- 10 スペクトクル 見世物。

問一 二重傍線部 a と e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部①「ルールにはゲームの本質をなす修辞学は含まれてはいないのだ」とあるが、これはどういうことか。説明として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ゲームの本質とはゲームの遂行という行為そのものであり、ルールがなかったとしても大した問題にはならないということ。
- イ ゲームの本質とは偶発的な要素によって成立するということ、ルールをもってその成立を説明することはできないということ。
- ウ ゲームの本質とは競争的に優劣を決めようとするところにある、ルールは永遠不滅の勝ち負けのための物差しにすぎないということ。
- エ ゲームの本質とは創造性のことを指すのであり、ルールを逸脱しようとするところにその面白さがあるということ。
- オ ゲームの本質とは人間的活動そのものであり、ルールはある程度のゲーム展開を予想するものでしかないということ。

問三 論理展開において7段落が果たす役割の説明としてふさわしいものはどれか。当てはまるものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 6段落までのスポーツのルールとゲームについて考察を受けて、7段落ではスポーツのルールと近代の関係へと話を展開しようとしている。
- イ 6段落まで述べられてきたゲームとルールについて、7段落で改めて記号論モデルという枠組みを示すことで、これから展開される考察の前提的知識を確認している。
- ウ 6段落まで述べられてきた内容を7段落で簡単にまとめつつ、読み手から自然と出される疑問を先回りして提示し、議論の方向を示そうとしている。
- エ 6段落まで述べられてきたゲームとルールを7段落でルールに限定することを暗示し、論の展開をわかりやすくしている。
- オ 6段落まで一貫してルールと呼んでいたものを、7段落でコードという概念に言い換えることで、新しさと専門性を前面にして論を展開しようとしている。

問四 傍線部②「コードを基盤にしていることが条件である」とあるが、このように筆者が述べる理由として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア スポーツとは、文化的な差異が自然と明らかになってしまいうものであって、ゲームを通じて文化の違いをはっきりさせるためには、共通のルールが必要となってくるということ。

イ スポーツとは、文化的な差異にこだわって行うことが前提であり、ルールは可能な限り、わかりやすい方がいいということ。

ウ スポーツとは、文化的な差異に影響されることなく行うものであって、そのためには、明示的で文化的な違いが強調されないようなルールが必要であるということ。

エ スポーツとは、文化的な差異を楽しむために行われるものであって、ゲームをするなかで、ルールから逸脱でき、個性が見られる方が面白いということ。

オ スポーツとは、文化的な差異を意識することなく行われるものであって、ルールは、その違いを隠蔽するものであるということ。

問五 サッカーを取り上げながら国や地域による特徴があることが述べられているが、そのことを筆者はどのような言葉でまとめているか。七文字で本文中から抜き出さない。

問六 傍線部③「この地平をわれわれは近代と呼んできたのである」とあるが、筆者は「近代」をどのように捉えているか。説明として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 近代とは、他の国や地域の文化の違いを受け入れ、世界規模での多様性を保障するものであるが、最たる例がスポーツであるということ。
イ 近代とは、スポーツのルールのように共通のルールを世界中で基盤とするということであり、本来あるはずの固有の文化を感じさせないものであるということ。

ウ 近代とは、ローカルかつ個別的な文化を基盤とした世界共通のルールをもつものであり、スポーツによってその地平が展開されたということ。

エ 近代とは、世界的、普遍的なルールを共通の基盤としてもつということであり、それによって国という概念がなくなったということ。

オ 近代とは、前近代のように暴力をもってその優劣を争うのではなく、決められたルールのなかで優劣を決めていくものであるということ。

問七 本文中の空欄

X	・	Y
---	---	---

 に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|---|--------|--------|
| ア | X…仮にも | Y…反対に |
| イ | X…そして | Y…しかし |
| ウ | X…実際に | Y…そのため |
| エ | X…ゆえに | Y…さて |
| オ | X…たとえば | Y…だが |

問八 傍線部④「外部にたいしてはエスニックなスペクタクルとして存続する道」とあるが、これはどういったことか。説明として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相撲は、日本固有のスポーツであることを頑なに守るため、伝統的なものしか認めないという閉じた道をとってきたということ。

イ 相撲は、日本の伝統的なスポーツではあるが、外国人力士も積極的に受け入れることで維持する道をとってきたということ。

ウ 相撲は、歌舞伎などの伝統芸能と同じであるとして、一般的な競技スポーツとは異なった道をとってきたということ。

エ 相撲は、日本の伝統的なスポーツであることを海外に向けた発信を通して行い、海外に多くのファンを獲得するという道をとってきたということ。

オ 相撲は、日本の伝統的なスポーツとして、海外の力士に対して日本の文化を受け入れさせる道をとってきたということ。

問九 傍線部⑤『ルールによってスポーツは完全に「現実の模倣」から脱するのである』とあるが、これはどういうことか。説明として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア スポーツにおけるルールは極めて抽象的なものであるため、スポーツをすることは現実から遠く離れていくことになるということ。

イ スポーツは現実の身体活動をもとにしているが、ルールによって実際のプレイヤーは普段、そういったことを全く意識せずに行うことができるということ。

ウ スポーツはルールがあることによって、人間関係といった煩わしい現実から離れて、熱中することができるということ。

エ スポーツはルールによってその成立がみとめられるのであって、本来あったであろう身体活動の意味はどこかにいつてしまうということ。

オ スポーツは、現実の身体活動を真似したものであるが、ルールが整えられるとかえって普段意識しないような身体性が強調されるということ。

問十 傍線部⑥「スポーツとはアナログかつデジタルなゲーム」とあるが、それはこういったことか。説明として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア アナログとは、人間がもっている本来の身体活動という意味で使われており、デジタルとは、数字に還元されてしまつて現実の生活にはほとんど意味をなさないものという意味で使われている。

イ アナログとは、人間の身体は自然のものであるという意味で使われており、デジタルとは、人工的に作られたものという意味で使われている。

ウ アナログとは、スポーツを見て抱く人間の感情という意味で使われており、デジタルとは、客観的で目に見える数字や結果という意味で使われている。

エ アナログとは、誰が、いつやるかなどといった要因によつて異なつてしまうという意味で使われており、デジタルとは、種々の要因によつて左右されることはないという意味で使われている。

オ アナログとは、スポーツの展開は予測できないという意味で使われており、デジタルとは、勝敗や数字に還元できるという意味で使われている。

問十一 この文章の表現上の特徴として、**適当でない**ものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア スポーツ全体を、記号論モデルを用いて抽象化、一般化して論じている。

イ 一つの話題について、議論を深めており、そのため形式段落一つ一つが長くなっている。

ウ 自分で述べたことに対して、反論を行いながら論を展開していつている。

エ 先行研究を明示し、その先行研究の方法に従いながらスポーツの分析を行っている。

オ 抽象的な記述と具体的な記述を織りなすことで、抽象的な記述をわかりやすくしている。